上海圖書館藏善本

山本周五郎全集

第十二巻

講談社

山本周五郎全集
第12巻　虚空遍歴
昭和39年6月20日　第1刷発行
定　価　480円
著　者　山本周五郎
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽町3ノ19
電話　東京(942)1111(大代表)
振替　東京3930
© Shugoro Yamamoto 1964

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

山本周五郎全集　第十二巻　目次

虚空遍歴　五

解説　木村久邇典　四〇一

口絵写真　福井県今庄にて（昭和三十八年八月）

提供小説新潮

デザイン　伊藤憲治

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

虚空遍歴

初めの独白

あたしがあの方の端唄をはじめて聞いたのは十六の秋であった。逢いにゆくときゃ足袋はいて、――で終るあの「雪の夜道」である。文句とふしまわしが、毛筋ほどの隙もなくぴったり合ったあの唄を聞いたとき、あたしの体の中をなにかが吹きぬけ、全身が透明になるような、ふしぎな感動に浸された。お座敷は柳橋の万清、客は蔵前の山五の隠居さまだった。山五の隠居は五十二三だったろうか、あたしは一年ほどまえからのごひいきで、山五さまのお座敷というと呼ばれないことはなかった。恥ずかしいことだけれど、あたしは生れつきいろごのみな性分らしく、九つか十くらいからそのことに興味をもちはじめ、十一のとしには誰に教えられるともなく独りでたわむれることを知ったし、あのほうの本を読みたいばっかりに仮名文字も覚えたくらいである。これはまわりの影響ではない、同じ松廼家から出ていたおたねちゃんなどは、あたしより一つとしうえだったけれど、そのことの話しになると子供も同様で、ちょっとこみいった言いまわしをされるとわけがわからず、とんでもない相槌を打って笑われたものだ。あたしはそうではなかった。あとになってわかったのだが、花街の生活は世間で想像するほど崩れたものではない。金に縛られている、という条件だけでも、うわついた気持では一日もやってはゆけないし、ことに、――特殊な人はべつとして、いつもまわりにいろざたを見たり聞いたりしているため、そういうことには却って冷淡になり、しばしば嫌悪感をいだくのが通例であった。そういう中で、あたしだけはそのことをこのみ、お座敷で客とやりとりをするような場合にも、姐さんたちがびっくりするようなことを言ったり、やってみせたりした。あたしはそういうことが好きだったのだ。十三の冬にはすすんでおとこと寝たが、それはしょうばいではなかったし、相手は四つもとしうえだったけれど、さそいかけたのはあたしのほうであった。それからのことは言いたくないが、いまでも忘れられないのは、それからあと、そのことが十日もないと気持がおちつかなくなり、ことに夜半にめがさめたりするときなど、朝になるまで眠ることができず、独りで自分のからだをもてあますようなことがしばしばあった、ということだ。もう一つ、いまでもわからないのだが、緑色の中の或る色を見ると、それだけで体がふるえるほどみだらな気分を唆られ、どうしても自分を抑えることができなくなる。緑には濃淡がいろいろあり、この色だとはっきり言いあらわすのはむずかしいが、栗の木の若葉がその色にもっとも近いと思う。それがどうしてそんな気分にさせるか、理由はまったくわからない。けれども、やがて、からだにそういう気分

が起こると、そこになにも似たようなものがないのに、その色が眩しいほどはっきりあらわれ、その鮮やかな眩しさのために、眼をあいていることができなくなるのであった。としもゆかないのにいやらしいこだと、まわりの姐さんたちは顔をしかめたし、お客の中には面白半分に、あくどいいたずらをする者もあった。あたしは少しもおそれなかった。姐さんたちには平気で、あんたたちだってしていることじゃないの、みんな知ってますよ、などと言い返したし、あくどい客には面と向かってずけずけやり返してやった。いつのことだったか、やはり山五の隠居のお座敷で、中年のお侍にくどかれたことがあった。あたしはなにかいたずらをするつもりだなと思ったけれど、承知をしてその人とべつの座敷へいった。ちゃんとしたお茶屋で、蔵前の旦那などが遊ぶ座敷は、きれいなものだと信じられているようだ。またそういうことが原則になってはいるのも儘かではあるが、客が男であり芸妓が女であることに変りはなく、裏へまわれば岡場所などよりひどいことがずいぶんあった。あたしは温和しくそのお侍のするままになっていたが、もういいころだとみてその座敷をとびだし、裾前の乱れを直して元の座敷へ帰り、すました顔で坐っていた。そして、お侍がまのぬけたような顔つきで戻って来ると、袂から紙に包んだあの道具を出して、みなさん見て下さい、こういう物をいただきました、と振ってみせたうえ、お侍に向かって、あたしこういうお道具は独りで使うことにしています、ご苦労さまでしたと言った。たぶん十五の冬だったと思う、あとで隠居やお茶屋の人にひどく怒られたし、五十日か六十日か箱止めにされたけれど、あたしは平気だったし、その侍のほうのとりなしで座敷へ出るようになってからは、まえよりもごひいきが殖えたものであった。——こういうときに、あの方の唄を聞いたのである。山五の隠居さまの脇に坐って、誰かの噂さ話しをしていたのだが、あの方の唄と三味線の音が聞えてきたとたん、ほかの話し声や物音はいっぺんに消えてしまい、その唄と三味線の音いろだけが、あたしのぜんたいを包んでしまった。殆んど忘我の状態のなかで、あたしは自分の体の中をなにか風のようなものが吹きぬけるのを感じ、それにつれて少しずつ、全身が透明になってゆくように思った。——蝶になる、あたしは蝶になってしまう。夢とも現実とも、はっきり区別のできない気持で、あたしはそう呟やいたものだ。むろん声に出してではなく、心の中でのことだが。そして、あたしはそのときから人間が変ったのである。毛虫が蝶になる、ということは話しに聞いていたが、自分の眼で見たことはなかった。にもかかわらず、自分の体が少しずつ透明になってゆくように感じたとき、どういう連想作用だろうか、毛虫が蝶になるのを見るように思ったのだ。

自分では気づかなかったが、まわりの人たちがまず、あたしの変ったことにおどろいたようであった。あたしは夢

中でもあの方のことをしらべていた。人も使ったし自分でも歩きまわったが、五十日あまりかかったろうか、そのあいだずっと、断われるお座敷は断わったし、ごひいきの客を怒らせたことも二三ではなかった。それでもどうにかやっていられたのは、あたしが松廼家のじつの娘であり、母がこの土地の生えぬきで、にらみがきいていたからであろう、ついでに言っておくが、あたしの父がどういう人であるかは、きびしい秘密にされていた。母はその人のほかに男を知らなかったと言うし、逢わなくなってからもずっと、その人からの手当が届いているようであった。——あたしは十七になり、十八になった。あの方の端唄は誰にも好かれ、到るところでうたわれた。大きな料理茶屋の座敷でも、縄暖簾をさげた居酒屋でも、道に酔いつぶれている馬子や、夜の辻に立って客を待つ女さえもうたうのであった。「よしやこの身は」とか、「天の川」とか「降りこめられて」とか「八重ざくら」などはもっとも流行ったものの中に数えられるだろう。あたしにはうたいだしの三味線を聞いただけで、あの方の作った唄だな、ということがわかるようになった。そして、十八のとしの秋、どうしても避けることのできない義理があって、西村さんに落籍され、浅草茶屋町の横丁にかこわれる身となった。西村さんは中国筋のさるお大名に仕える御老職で、としは五十二歳、まるで祖父と孫のようだったが、こういう世界ではべつに珍らしいことではないし、あたし自身もそれほど苦痛とは思わなかった。西村さんは殿さま付きの御老職で、月に一度か二度みえるだけだし、殿さまが国許へお帰りになるときにはお供をするので、一年あまりは留守になった。お手当は余るくらいだったし、ばあやを一人使って、あたしは好き勝手な、のびのびとした日を送っていた。暇があると松廼家の母を訪ね、半日も話しくらしたり、ときには泊って来たりしたが、そのたびに母親から諄く言われた。旦那を大事にしろ、あんないい旦那はまたと二人あるものではない、浮気などは決してするんじゃあないよ。あたしは浮気などしようとも思わなかった。お金にもまあ不自由はないし、しようと思えばそのくらいの暇や機会はいくらでもあった。二度か三度、危なくそうなりかかったこともあったが、どの場合にもいざというときになると、あの方の三味線のねいろが聞えてき、すると、まるで崖から落ちでもするように、すうっと気持が冷えてしまうのである。これは西村さんのときも似たようなもので、どんなにされてもなんの感じも起こらない。囲われた体だから拒むわけにはいかないし、じつを言うと拒もうという気持にさえならないのであるが、同時に、そのあいだずっと、あたしの耳にはあの方の端唄と三味線の音が聞えているのであった。断わるまでもないだろうが、それは現実のものではないし、どこかで弾いたりうたったりしているのが聞えて来るようでもなかった。過去と現在と未来とが、わかちがたく一つに溶けあっているところ、つまり「時間」とも関係がなく、

「場所」とも関係のないところから聞えて来る、というように思えるのである。あたしはそのことに少しの不自然さも感じなかったし、時が経つにしたがって、聞きたいと思えばいつどこででも聞くことができた。あたしにはあの方が作る唄の、ふしまわしにある独特なくせがわかるので、ほかの人の作った唄と間違えるようなこともなかったし、なにか読んでいて、唄になりそうな文句があると、あの方のくせをまねてふしを付けてみたことなどもある。もちろんまねだけで、唄にもなにもなりはしないが、頭の中ではそのふしまわしが自由に綴れるのであった。

二十一のとしに、あたしはまた松廼家から芸妓に出た。西村さんにはあたしが面白くなかったらしい、おまえはまだ女になっていないんだなと、幾たびか言われた。西村さんは以前のあたしの評判を聞いていて、あたしがとしに似合わず凄いと信じていたのだろう、それでも三年あまり、いつかそうなるものとたのしみにしていたが、ついに失望して手を切る気になった、というのが本心のようであった。——茶屋町の家をたたんで松廼家へ帰ったあたしは、半年ほど遊んだのち、おけいという本名でおひろめをした。松廼家には抱えが五人いて、中の三人は土地でも指折りの売れっ妓だったが、返り新参のあたしも、それに負けないくらいごひいき先ができた。そうしてまもなく、あたしは森田座の舞台で、初めてあの方のうたう姿を見た。

一の一

冲也はざっと風呂を浴びて出ると、ばあやのお幸の支度した鬢盥や鏡架を、陽の当っている縁側へ移して、浴衣のままあぐらをかき、髭剃りにかかった。

「そんな恰好でそんなところへ出て」とお幸が茶の間から呼びかけた、「風邪をひいてしまいますよ、若旦那」

「汗が乾かないんだ」口を歪めて剃刀を使いながら、冲也が言った、「生田が来ているとか言ったな」

お幸は丹前を持って来て、冲也の肩へ掛けてやりながら言った。

「いまお酒をめしあがっていますよ」

「いつ来たんだ」

「まだ暗いうちでしたよ」とお幸が言った、「うしろの衿を剃りましょうか」

「いいよ、小屋へいって平公にやらせよう、それより生田のやつ、こんな朝っぱらからどうしたんだ」

「ゆうべごいっしょじゃあなかったんですか」

「いっしょじゃあなかった」

「わる酔いをなすってるようにみえますけれどね」とお幸は言った、「わたくしちょっと酒屋までいって来ますから」そしてたち去りながら、振返って注意した、「口をききながら剃るとまた傷をしますよ」

「聞えたよ」と冲也は言った。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

彼は体つきも逞ましく、顔にも精気があふれていた。肥えているようにみえるが、筋肉はよくひき緊っていて、どこにも脂肪の溜っているようすはなく、動作も極めて柔軟だし敏捷であった。剃刀を使うにしたがって、色の白い頬に髭の剃りあとが青くあらわれ、力のこもった一文字なりの唇は、紅でもさしたように赤かった。——髭剃りを終った冲也が、剃刀をしまって立ちあがると、客間から生田半二郎が出て来た。生田は片手に湯呑を持ってい、蒼い、虚脱したような顔で、意味もなく笑いかけた。

「住吉町を破門になった」と生田は言った、「十三蔵を殴った、それから新井泊亭の本を持って来たよ」

冲也は彼の顔をみつめていたが、「顔を洗って来る」と言って勝手のほうへ去った。顔を洗っているとお幸が帰って来、冲也は居間へはいって、お幸に髪を結い直させ、着替えをして戻ると、生田は縁側に坐っていた。

「酒が来るようだ」と冲也は呼びかけた、「あっちへゆこう」

「沈丁花が咲きだしたな」生田は狭い坪庭を眺めながらぼんやりと言った、「——あれは沈丁花っていうんだろう」

「咲きだしたんじゃない、もう終りなんだ」と冲也が言った、「二月の末だぜ」

「ふん」といって生田は立ちあがった。

八畳の客間は暗く、行燈のぼけたような光りが、火鉢と酒肴の並んだ膳を照らしていた。冲也が窓をあけようとすると、生田はいそいで「よしてくれ」と止めた。このままのほうがいい、明るい光りは見たくないんだ、と言った。部屋の空気は重く濁って、饐えたような酒の匂いがした。

「どうしたんだ」冲也は火鉢の脇に坐った。

「酒はまだかな」

「いま来るだろう、まあ坐れよ」

「悪い辻占だな」生田は坐り、まだ湯呑を持ったままで言った、「てっきり咲き始めたんだと思ったら花は終りか、おれの言ったりしたりすることはいつもこうだ」

「なにかあったのか」

「茶番みたいような話しさ」生田は片手をうしろへやり、平たい袱紗包を取って冲也に渡した、「——泊亭から預かって来た本だ」

冲也は包を解いて、一綴の冊子を取りあげた。藍色に源氏香の型を浮かした表紙に「青柳恋苧環」という題簽が貼ってあった。

「いとやなぎ、と訓むんだそうだ」と生田が言った、「いとやなぎ恋のおだまき、注文があれば直してもいいって、言ってたぜ」

冲也はそれを脇に置いて生田を見た。

「十三蔵を殴ったとはどういうことだ」

「まえから殴りたかったんだ、根性のきたない、腐ったような野郎だからな、——中藤冲也も気をつけるほうがいいぜ」

お幸が燗徳利を二本、盆にのせてはいって来、若旦那もあがりますかと訊きながら、生田の膳にある燗徳利の空いたのと、持って来た二本とを取替えた。おれはいいと冲也が答え、生田は水を一杯ほしいと言った。お幸は冲也に茶、生田に水差と湯呑を持って来て、すぐに去った。

「十三蔵のやつは中藤のとりなしで帰参がかなった」と生田は続けた、「あのとき中藤がそっぽを向いたら、二度と住吉町の敷居はまたげなかったろうし、常磐津はもちろん、浄瑠璃の世界ぜんたいから締め出されたに相違ない、なにしろあんなうすっきたないまねをしたんだからな」

「それが殴った理由か」

「昨日おれは師匠に呼ばれて、破門を申し渡されたんだ」

「大師匠か」と冲也が訊いた。

「若師匠だ」

「――それで」

「十三蔵の中傷さ」と生田は言って、新らしい湯呑に水を注ぎ、一と息に飲みほした、「あいつだけが知っていて、あいつのほかには知っている者のないことだ、それを師匠に告げ口しやあがったのさ」

冲也は茶を啜りながら生田を見、生田が眩しそうな眼つきになるのを認めて、「女のことだな」と反問した。

「十三蔵にはなんの関係もありゃあしない、おれたちがどうなろうと、十三蔵にはまったく縁のないことなんだ、あいつには痛くも痒くもないことなんだ」

「相手はなに者だ」

「おれの口から言わなくってもすぐにわかるさ」生田は酒を飲んだ、「――ちょうど十三蔵のやつが稽古場にいたから、外へ呼びだして問い詰めたら、おれの身のためを思ってしたことだとぬかしゃあがった」

「本当にそのつもりかもしれないだろう」

「ばかなことを言うなよ」

「彼は気の弱い人間だ」と冲也が言った、「それを隠そうとしていろいろやってみるが、却って笑われたり爪弾きをされる、友達がないから友達を作ろうとすれば、心をみすかされてばかにされてしまう、去年の都座のこともそれなんだ」

去年の春は中村座が休んだので、控櫓の都座がその代りに興行をした。役者は仲蔵、彦三郎、八百蔵、仁左衛門その他で、「ふりわけ曾我」を出し、道行の「桂川」には常磐津が出語りを勤めた。そのとき十三蔵は、八百蔵の番頭にはたらきかけて、富本ぶしを出語りに使わせようとした。富本ぶしは常磐津から出て、新たに一派をなしたものだから、十三蔵の企んだことは師匠に対する二重の裏切りであり、大師匠と呼ばれる文字太夫は怒って、彼を破門した。

「気が弱いのは中藤も同じさ」と生田が言った、「あいつは帰参させるべきではなかった、それを泣きつかれたために、百方奔走したうえついに大師匠をうんと言わせた、つ

まり中藤も気が弱くて、十三蔵の泣きおとしにそっぽが向けなかったということだな」
「しかし彼はみごとに立ち直ったぜ」そこで冲也は片手をあげた、「断わっておいた筈だが中藤と呼ぶのはよしてくれ、おれは常磐津小松太夫、名前はただ冲也だ」
生田は次の徳利を取って酒を注いだ。
「おまえさんには見えないんだよ、冲也」と生田は言った、「あいつの企んだ事は赦す余地のないものだ、いいかい、あいつは師匠を裏切っただけじゃない、常磐津そのものを裏切ったことだ、あいつはどんなことがあっても赦してはならなかったんだ」
「もう済んでしまったことだ」酔っている相手になにを言っても始まらない、といったような口ぶりで冲也が答えた、「それより生田はこれからどうするつもりだ」
「ゆだんしないほうがいいぜ」生田半二郎は酒を啜りながら言った、「十三蔵にとって帰参のかなったことは一生の屈辱だ、あいつはおまえさんを泣きおとし、おまえさんのおかげで破門がゆるされたことを、決して忘れやあしないからな」生田は独りで頷ずき、ちょっと歯を見せてからまた言った、「――仰せのとおり、あいつは気の弱い人間かもしれない、しかし気が弱い以上に、わる賢こくて執念ぶかいやつだ、あいつは」
「もうそのくらいでよせよ」
「あいつは冲也に助けられたことを忘れないだろう、そして折があれば、冲也を自分と同じような立場に追い込もうとするに違いない、それをよく覚えておくほうがいいよ」
お幸が襖をあけて、はいっては来ずに、冲也の顔をもの問いたげに見た。
「もっと飲むか」と冲也は生田に言った、「おれは人と会う約束があるんだ」
「元柳橋か」
「うん岡本だ、大和屋と相談したいことがあるんでね、――どうする、飲みたければ飲んでいろよ、そっちにもこれからのことで話しがあるんだろう」
「おれは一度おまえさんの顔をぶん殴りたいと思っているんだ」
冲也はお幸に頷ずいてみせながら、立ちあがった。お幸は襖をあけたまま去り、生田は湯呑の酒を飲みほした。
「おまえさんの顔には幸福と満足があぐらをかいている、昔からそうだったし、ちかごろはますますそれがひどくなった」生田は片方の膝で貧乏ゆすりをしながら言った、「――いつか一度、きっとこの手でぶん殴ってやるぜ」
「十三蔵のあとでか、まえにか」
「十三蔵がどうした」
「彼がいつかおれを窮地に追い込むと言ったろう」冲也はやさしげに微笑した、「生田もおれを殴るそうだが、そのまえかあとかと訊いたんだ」
「おれのやりたいときにさ」

「遠慮はいらないぜ」と冲也は片手をあげ、それを股へはたと打ちつけながら言った、「――帰ってから相談しよう」
そして彼は出ていった。

一の二

冲也は駕籠に乗ると、持って来た泊亭の本を披いてみた。それは冲也が頼んだ浄瑠璃の台本で、芝居の中幕に使う、所作を主とした心中物語であった。
「あいつの負けず嫌いも久しいものだな」冲也は微笑しながら呟やいた、「十一二のじぶんからおれを殴ってやると言っていた、そのくせいつもおれからはなれない、ひょいと振向いてみると、そこにしょんぼり生田がいるというふうだったな」
彼は泊亭の本をひろげたまま、その眼をぼんやりと前方へ向けた。
二人の屋敷は近くはなかったが、少年時代から親しくつきあってきた。中藤の屋敷は麹町の土堤四番町、生田は清水御門の外にあった。はっきりした記憶はないが、小さいころ、田安御門の外にある広い草原で、よくいくさ遊びをやった。初めて知りあったのはそこだったろう、年は同じだが、おれより背丈が低く、痩せていて泣き虫だった。泣き虫のくせに強がりで喧嘩っぱやく、相手かまわずにかかっていっては泣かされ、そのたびにおれはあやまったり、止めにはいったり、ときには生田に代って相手をやっつけたりしたものだ。生田家は五百石あまりの旗本、中藤は同じ旗本でも八千石で、その身分のひらきも、彼の神経にひっかかっていたらしい。
――いつか一度は殴ってやる。
生田は十五六のころから、冗談のようによくそう言っていた。単純な表現ではない、それはもっとも親しい感情をあらわすと同時に、本気で殴りたいという気持をも含んでいた。生田はいつもおれを仕負かそうと考えてきた。おれが家族間の面倒な問題で、十九歳のときに家を出、常磐津文字太夫の弟子になったとき、生田もおれのあとを追って家を出た。――彼にはそんな必要はなかった。二男坊だが養子の縁談も始まっていたそうだし、かなりな良縁だったように聞いた。それにもかかわらず家をとびだし、芸人なかまになどはいったので、彼は一族から絶縁されてしまった。おれたち年代の者は、もともと武家生活というものに反感を持っている。むろんすべてがそうだというのではない、生れながらに侍が身に付いている、という者のほうが多いだろうが、そういう人間でさえ、武家生活に心から満足しているとは思えない者が少なくないようだ。
たしかに、生田は芸ごとが好きだ。養子になって堅苦しい一生を送るよりは、好きなみちで気楽な生活をするほうがいいだろう。けれども、生田がこのみちにはいったのは、おれを仕負かそうという気持が一つの動機になっている。おかしな話しだが、そのくせ彼はおれと反対なことし

かしない。いい喉を持っているうえに、ふしまわしの独特な艶っぽさは、文字太夫門下でも五選の一人にあげられるだろう。兼太夫を継ぐのは生田だと、大師匠も認めていたと思うのだが、すると彼は脇へそれてしまい、女でいりが始まった。――芸人には付きものかもしれない、だが、生田の相手はいつも堅気の女なので、三度に一度はごたごたが起こった。

「それでおれを殴るか」冲也は口の中で呟やいた、「――ばかなやつだ、いったいこんどの女というのはなに者だろう」

駕籠はまもなく元柳橋へ着いた。

料理茶屋「岡本」は薬研堀に面している。もともと地着きの大きな地所持ちで、茶屋のほうは先代の新助がやり始め、ほんの道楽のつもりだったのが、思いがけなく当って、いまの新助の代になってからは、敷地も建物も倍以上にひろげ、江戸市中でも指折りの料亭になった。――冲也も子供のじぶんから、祖父や父に伴れられてよく「岡本」へ来た。川びらきの花火見物とか、涼み船とか、もっとしばしば食事をしに来たもので、あるじ夫妻や息子の新次、そして娘のお京とも、そのころからの馴染であり、彼が四番町の家を出たあと、神田の新石町でお幸と家を持つまでは、この二階座敷に五十余日も世話になっていたくらいであった。

冲也は「岡本」の門をはいると、玄関ではなく、家族の出入りする格子戸のほうへまわった。中庭には植木屋が三人いて、松の木から巻藁を解いていい、あるじの新助が黙って側で見ていた。格子戸をあけると、お京が長唄の師匠を送りだしに出たところであった。杵屋小十郎というその老師匠は、冲也を見るとすぐに、脇へ身をよけようとし、片方の足を下駄から踏み外してよろめいた。お京が「あぶない」と言って支えようとし、老人は手を振ってそれを拒んだ。

「これが芸の内でね」と言って老人は笑った、「いえ大丈夫、そそっかしいのがあたしのたった一つのお愛嬌なんだから」そして冲也に向かって一揖した、「どうぞおとおりなすって下さい若旦那、どうぞ」

冲也は会釈をしてあがった。

内所と板場の境にある階段の下で、うしろからお京が追いついて来た。年は二十歳になるし、背丈もたっぷりしているし、しもぶくれの顔も、無表情なくらいおちついていて、どうかすると三つ四つも老けてみえることがあった。生毛のような薄墨色のぼうぼう眉毛や、ちか眼だそうで、いつも少し眩しそうに細めている眼つきや、ふっくらとした受け口。また、いくらか鼻にかかった声で、一と言ずつ辿るようにものを言うところなど、ぜんたいが町娘というより、相当な武家の奥ででも育ったような気品が感じられた。

「お帰りなさい」とお京が言った、「みなさんもうみえて

いますわ」
「みなさん、――大和屋だけじゃあないのか」
「立花屋さんと紀伊国屋さんがごいっしょです、立花屋は八百蔵さんのほう、ご存じなかったんですか」
沖也はちょっと浮かない顔をした。彼は階段に足を掛けたが、二階座敷のどこかで三味線の音がするのを聞き「もう客か」とお京の顔を見た。
「ええ、半刻くらいまえかしら」とお京は答えた、「お夏ちゃんの話しによると、御大身のお武家さまのようですって、お年は六十くらいで、なか（新吉原）の年増さんが二人、男芸者が一人だといったかしら、ああそう、――伊佐太夫さんもいっしょですって」
「伊佐、――十三蔵が」
「お夏ちゃんはそう言っていましたよ」
沖也は首をかしげながら、疲れたような動作で階段を登っていった。彼は岩井半四郎とだけ話しあいたかった。二人だけでと断わりはしなかったが、自分の気持は大和屋にはわかると思ったのだ。それをどうして、市川八百蔵や紀伊国屋などを伴れて来たのか。立花屋も宗十郎もまだ親しくつきあってはいない、かれらがいるなら今日の話しはやめだ、と沖也は思った。
二階のその座敷は十畳で、南側は堀に面しているし、廊下へ出れば大川が見えた。いまも廊下のほうの障子をいっぱいにあけてあり、やや西に傾いた春の午後の日光が、座敷の中まで明るくさし込んでいた。――ここには床の間がなく、東側は窓になっており、北側は六曲の屏風を立て、そこに三人の客が酒肴の膳に向かっていた。まん中に沢村宗十郎、その右に市川八百蔵、左に岩井半四郎という順であるが、半四郎と宗十郎のあいだに、一人分の席があけてあった。
「お先に始めています」と宗十郎が会釈して言った、「勝手ですが挨拶はぬきに致しましょう、どうかこちらへ」
半四郎があいている席を示し、沖也はいちど三人に向かって辞儀をしてから、その席へいって坐った。お京が女中たちに手伝わせて、沖也の膳をととのえるまで、話しはあまりはずまなかった。宗十郎は沖也に、どう挨拶をしていいかわからない、と言った。四番町の殿さま――というのは沖也の父をさすのだが、――にはずいぶんごひいきになっている、本来なら席を並べるわけにはいかないのだが、若旦那はいま常磐津小松太夫で、芸の世界では失礼ながら自分が下座につくわけにはいかない。もう一つ、自分はあなたの端唄が好きであるし、あなたの作る端唄にはぞっこん惚れている。この芸の点では、自分よりはるかに格が上位だと思っている。挨拶に困るのは要するにこういうわけである、と宗十郎はしんから当惑したように笑いながら言った。
「紀伊国屋ともある人にそう言われては、私こそ挨拶に困ります」沖也は尋常に会釈をして言った、「土堤四番町の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo